

Book Review

歯界展望別冊

10 歯前後欠損症例の「読み」と「打つ手」

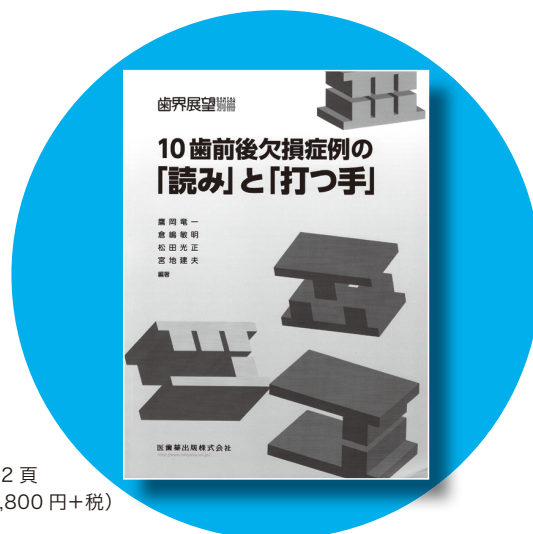
鷹岡竜一・倉嶋敏明・松田光正・宮地建夫 編著



Reviewer

古谷野 潔 Kiyoshi Koyano
(九州大学大学院歯学研究院)

A4 判変, 152 頁
定価 (本体 5,800 円 + 税)
医歯薬出版刊



本書は、その名の通り 10 歯前後の歯の欠損をもつ症例に対してどのように対応するかをテーマとしている。では、なぜ 10 歯前後欠損症例なのか？取り上げる理由は、冒頭 (preface と Chapter 1) に詳しく述べられている。すなわち、10 歯前後の欠損は、18 歯前後の現存歯を有する歯列でもあり、現存歯の抱える問題と欠損歯列が抱える問題が複雑に錯綜している厄介な状況である。さらに 10 歯前後の欠損は病態が多様であり、ルーティン化した治療ができず、個別対応が必要となる。しかし、何を基準に個別対応するかは確立されていない。ここに「10 歯前後欠損症例」を取り上げ、その対応を考える意味がある。

本書の基盤となっているのは、編者の一人である宮地建夫先生の「欠損歯列を病態として捉える」という考え方である。宮地先生は本書中で、この考え方について次のように述べられている。欠損補綴の役割には 2 つあり、一つは患者が今かかえている問題を解消することであり、もう一つは、患者が自覚していない将来の問題 (欠損の拡大) のリスクを考慮し、歯列を守る

ことである。すなわち、「欠損歯列を病態として捉える」とは、この 2 つの視点、特に後者の視点を重視することであり、その流れのなかで 10 歯前後欠損症例を捉える必要がある。

Chapter 2 では、欠損歯列に関するデータが示されている。前半は、23 名の臨床医が協力して得た 2,221 本の抜去歯のデータを基に、10 歯前後欠損の特徴が欠損のリスクの視点から解説されている。すなわち、初期欠損では齶蝕や歯周病などのリスクが影響しているが、10 歯前後欠損症例では咬合支持歯の喪失リスクが高くなる。したがって、10 歯前後欠損症例では、咬合支持歯を守ることが欠損拡大を食い止めるうえで重要である。また、10 歯前後欠損症例では、同じ現存歯数であれば、咬合支持数が少ないほど咬合支持歯の喪失リスクが高い…など、臨床上の示唆に富むデータが多数示されている。後半では、部分欠損症例における各種補綴装置の生存率についての文献的考察がなされており、欠損補綴治療の長期経過を考えるうえで、有用な客観的データが示されている。

Chapter 3 では、21 例の多様な 10 歯前後欠損症例と治療結果が提示されている。すべての症例が初診・補綴終了時・経過時と時間軸に沿って提示されており、読者は順に読み進むだけでも得るものが多いが、それぞれの症例の主治医になったと仮定して自分なりに治療計画を考え、経過を予測したうえで、それぞれの症例を見てみると、また違った角度から得るものが多いだろう。さらに、症例提示の後に宮地先生による「21 症例の傾向を探ってみて」と題された考察と総括が掲載されており、考えを整理するうえで多いに役立つ。

最後の Chapter 4 は、Chapter 3 の 21 症例を基盤とした 4 名による座談会となっており、10 歯前後欠損症例の「読み」と「打つ手」を考える手がかりが多く示されている。

本書は「10 歯前後欠損症例」についての書籍ではあるが、私はむしろ本書を通じて、欠損歯列全体を考えるうえでの新たな視点を得たような気がする。読者諸氏も新たな目を開く本書をぜひ手にとることをおすすめする次第である。